

「第 32 回住まいのリフォームコンクール」総評

このコンクールも今年で第32回を迎えた。昨年は、30回の節目を過ぎたのを機に「ビジネスモデル部門」を新設したが、初回からこの新部門にふさわしい優れた応募案があり、期待どおりの成果が得られた。そこで今回も、基本的には前回と同様の募集・審査方針とした。また前回は、リフォームの内容をより多様な面から評価し、優れたリフォームの手法・アイデア・技術を広く紹介すべく、従来の4つの特別賞に加え、「分野別特別賞」および「企画賞」を新設した。今回は基本的には前回の方針を継続しながらも、審査過程において位置づけがやや曖昧な面があった「企画賞」は、廃止し、「分野別特別賞」に統合した。

今年度の作品部門の応募状況は、応募件数は前年比で約7%の減少だが、応募者数に殆ど変化は見られない。同一企業から多数の案が出される傾向があった状況に比べれば、応募件数減は低迷というより寧ろ質的な進歩であり、このコンクールがさらに充実の段階に入ったとの見方もあろう。応募作品の傾向としては、直近4年間の範囲では共同建て（マンション）の比率にやや大きな増加傾向が見られたものの、基本的には例年通りの動向である。応募作品数の傾向を地域ごとに見ると、減少は殆ど関東・近畿のみに見られることから、大都市圏でのリフォーム需要の低迷が懸念されるが、その反面で地域に密着し、地方ごとの特徴を生かすようなリフォームの活性化が期待される。

作品部門について、その傾向を敢えて一言で表せば、特に目立って高水準の作品が見られなかった反面、総じて水準は上がっている、という印象であった。リフォームのパターンで言えば、いろいろなタイプのリフォームがほぼ安定的に出揃った印象である。部分的なプラン変更と総合的な性能向上が主流であることに変わりはないが、古民家再生、空き家活用、用途変更、住戸内土間スペースなどは、ある種の定石的手法になりつつあり、さらに2階撤去や吹抜けによって規模を縮小する「減築」や、ユニークな試みとしてDIY賃貸住宅が登場するなど、リフォームにもいろいろなヴァリエーションが出揃い、それらが定着しつつあるとも言えよう。デザインのレベルについても、全般に応募作品の水準は高くなってきている印象である。

ビジネスモデル部門については、応募件数13件と、初回の18件からは減少したものの、内容を勘案すれば応募状況は良好であった。空き家・中古住宅の活用や流通促進、既存住宅の調査・診断・見積等とそのための技術者育成、きめ細かいユーザーサポートとそのための多能工育成、中古住宅のブランド化とノウハウのマニュアル化など、ビジネスモデルとしての完成度が高い案も見られた。今回優秀賞の対象にならなかった応募案には、実績が乏しく高い評価に至らぬものの、狙いには期待が持てそうな案もあった。一見平凡そうなテーマであっても、リアリティーがあり実績を積んだ内容の応募を、今後とも大いに期待するところである。

なお、前回の総評でも述べたことだが、応募書類のプレゼンテーションにはさらに水準向上を期待したい。作品の内容は良さそうであっても、応募シートの表現が稚拙なためにそれが十分に伝わらないのは、残念な限りである。過去の入賞作品集なども参考に、そのまま公表しても模範リフォーム事例集として十分活用できる水準のプレゼンテーションが、強く望まれる。

住環境の水準向上に、リフォームという手段が大きな役割を果たす時代になりつつある。このコンクールがそのために役立って行けるよう、今後とも多くの関係者の皆様のご協力をお願いする次第である。

第32回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 真鍋恒博



審査風景